

前世紀後半より中国大陸では戦国・秦・漢期の写本が多数発見されており、当該期の学術を研究する者に大きなインパクトを与えつづけている。これらが「写本である」ことから生じる問題点の多くは、後世の写本の場合と共通するであろうから、ここでは省略したい。たとえば、特に戦国時代の写本の場合、個々の文字を現代の字体に書き改めていく「隸定」と呼ばれる作業がその読解の基礎をなすが、当該時期の書写習慣に関する個別の問題を除けば、ここにおける問題点は多く「翻刻」という作業のかかえる問題点と共通のはずである。また、近年報告書が刊行された浙江大学蔵戦国楚簡の『春秋左氏伝』など、偽作の疑いがかけられているが、新たに発見された写本について（その発見のされ方にもよるであろうが）、真偽の問題がつきまとうこともまた、後世の写本の場合と同じであろう。それから、戦国・秦・漢期の写本を解読していく場合、「仮借」の問題が大きなウエイトを占めるが、これも本質的には伝世文献の読解における仮借字の問題と共通するので、ここでは取り上げない。ここで話題を提供したいのは、この時期の写本に特有のものと思われる一二の問題についてである。

その一つは竹簡という書写媒体の性質に起因する。馬王堆漢墓の帛書や、楚帛書が絹の布に記されているのを別にすれば、これまでに発見された当該時期の書籍は竹簡または木簡（木牘）に記されている。これが書写された当初は二三か所を糸で綴じた冊書の形をしていたはずであるが、それがそのままの形で出土してくることはまずない。通常は、綴じ糸が朽ちて、もともとの簡の並びがわからない状態で出土してくるから、その本来の簡序を推定して各篇の文章を復元していく作業が不可欠となる。この作業の具体的な進め方は、出土時の状況（もともとの冊書の形がどれだけ保存されているか等）によって異なることになるだろうが、基本的には、①簡の形態による分類と②書体（書き手）による分類がまず行われ、その上で③各簡の内容に基づいた綴合が行われることになる。ただ、簡の形態と書体の一致はそれらが同一篇に属することを必ずしも保証しないから（複数の篇が同じ書き手により同じ形態の簡に記されることがある）、①、②は予備的な作業に過ぎず、各篇の文章の復元は最終的には多く③の作業によることになる。細切れになっている文章をその文脈をたよりに復元する③の作業が困難であるのは言うまでもない。のみならず、出土資料の場合、簡が抜け落ちていたり、簡の一部が欠損したりして、その文脈が断ち切られている部分が少なくないから、この作業はさらに困難を極めることになる。この困難を乗り越えて一応の簡序が確定された上で報告書が刊行されるのであるが、報告書に示された簡序がそのまま研究者の間で受け入れられていく場合の方がむしろ少ない。報告書が刊行されるや否や、簡序に関する論文がネット上に投稿されて、喧々囂々の議論が行われることになる。その結果、多くの研究者が妥当であると認める簡序へと落ち着いていく場合もあれば、依然として簡序の問題が片付かない場合もある。

この簡序の問題は、時に分篇の問題とも絡んでくる。たとえば、上海博物館蔵戦国楚竹書（以下「楚竹書」と略記）の報告書には『昔者君老』と『内礼』の二篇がおさめられている。前者は、整理者が命名したものであり、後者はもともと篇題が記されていたものであるが、両者は簡の形態と書き手を共にしており、かつ「君子曰」で始まるいくつかの短

章を含むという文章構成上の共通点を有している。『昔者君老』の全体または一部分がもととは『内礼』に属していた可能性が高いのである。このような分篇や文章の並びのレベルから議論を始めないといけないという事態は、紙媒体に記される後世の写本の場合、ほとんど無いのではなかろうか。

もっとも、媒体の性質としては紙に近い帛書の場合でも、通常いくつかの帛片に分断されてしまっているし、それぞれの帛片の周辺部は文字が欠けていることが多いから、同様の問題が生じてこないわけではない。特に、数文字だけ残された帛片の場合は、その本来の場所を確定することは一般に困難である。とはいえ、竹簡の場合ほどに綴合の問題が取り上げられることがないのは、その書写媒体としての性質によるのであろう。

ここで紹介しておきたいのは、この簡序の推定において近年注目されている「劃線」についてである。「劃線」とは、北京大学蔵西漢竹書の『老子』が整理される際に発見されたものであるが、簡の背面に斜めに記された線であり、冊書の綴じ糸がほどけて簡がバラバラになった時に簡序を復元する備えとして付けられたものと考えられている。この北京大学蔵の『老子』は各章が追い書きされておらず、章ごとに簡を改めて書かれている。このような場合、文章を繋いでいくことによって簡序（＝章序）を確定することはできない。幸いこの「劃線」が発見されたことにより、今本や馬王堆帛書『老子』とは異なるその章序が明らかにされている。この「劃線」は精華大学蔵戦国竹簡など他の竹簡においても記されているようであり、今後、簡序推定の有力な手掛かりとして期待されている。

次に、伝世文献と重複する新出土資料がもたらした問題を取り上げたい。『老子』や『論語』を始めとして、伝世文献と重複する資料が少なからず出土している。これらが、今本を校訂する上での貴重な資料であることは、他の後世の写本の場合とかわらない。異なるのは、それらがあまりに古くて、今本につながるテキストが固定される以前のテキストの状態をわれわれに伝えているという点である。

いま、テキストの分岐を樹形図であらわすならば、通常の校訂作業は、写本を含めた各テキストの関係を繋ぎながらその枝別れのもとにある幹（祖本）の状態を復元して行く作業となろう。伝世の先秦文献の場合、この作業は通常どんなに遡っても漢代の校定本より遡ることはできない。『叙録』の残っている『荀子』（『孫卿書』）を例に取れば、三百二十二篇から復重の二百九十篇を除いて『孫卿書』三十二篇を劉向は定著しているわけであるが、彼が校定する以前の三百二十二篇の姿についてそれを確かな形で知る手だてをわれわれは持たない。現存する『荀子』のテキストは基本的にすべて唐の楊倞注本に由来し、楊倞注本は劉向校定本に手を加えたものであるから、伝世のテキストをいくら集めて校訂を加えても、漢代の壁を越えることはできないのである。出土資料が伝えているのは、この壁の向こうの世界である。

『荀子』からの出土例はまだないから、『礼記』緇衣篇を例に取りたい。現在われわれは戦国時代に竹簡に記された緇衣篇を二つ手にしている。郭店楚墓竹簡『緇衣』と楚竹書『緇衣』である。この二つのテキストの間に本質的な違いはないので、ここではこれをあわせて楚簡本『緇衣』と呼びたい。他方、楚簡本『緇衣』と今本『礼記』緇衣篇とでは、章のならばが大きく異なる他、楚簡本に無い章が今本には付け加えられているなど、少なからぬ違いがある。

今本『礼記』の緇衣篇は『子思子』より取られたものと通常考えられているが、唐代の

『意林』や『文選』李善注が『子思子』として引く緇衣篇の文章は、楚簡本『緇衣』とは一致せず、かえって今本『礼記』緇衣篇の文章と一致する。このことは、唐代に存在した『子思子』（の緇衣篇）が楚簡本と同一系統のテキストを直接の祖とせず、その祖とするところが今本『礼記』緇衣篇と同一であったことを示している。小戴記四十九篇と『漢書』芸文志所載の記百三十一篇、子思二十三篇等との関係をどのように考えるかによって、その「祖」をどこに求めるかが異なってくるが、いずれにせよそれは漢代以後に置かれることになる。伝世の『礼記』テキストや、『子思子』の佚文による緇衣篇の校訂作業はこの祖本を遡ることができない。かりに六朝期の『礼記』や『子思子』の写本が発見されたとしても、この限界を乗り越えることができないことには変わりはない。同じく今本を校訂する資料の出現とはいっても、戦国期の写本と、六朝以後の写本や版本とでは、その持つ意味が全く次元を異にするのである。

この戦国期のテキストの出現がわれわれに教えてくれたのは、先秦文献について、漢代以後のテキストがいかに多くの錯乱を被っているか、ということである。楚簡本『緇衣』と今本『礼記』の緇衣篇を比較してみれば、今本における章の付加、章の切り誤り、各章末に付けられた『詩』『書』の引用の割り当ての誤り等の混乱は一見して明らかである。もう一例を挙げれば、楚竹書で整理者が『民之父母』と名付けた一篇は、『礼記』孔子間居篇の前半部とほぼ一致している。この部分は、子夏の問いに応じて孔子が「五至」、「三無」等について説明を加えていく形で記されているのであるが、孔子間居篇では、「五至」を説明する末尾の部分が次のようになっている。

…哀樂相生。是故正明目而視之、不可得而見也。傾耳而聽之、不可得而聞也。志氣塞乎天地、此之謂五至。

対句を破る形で付け加えられている「正」字が読みがたいが、読みがたいのも当然で、次に示した『民之父母』の対応部分と見比べてみれば明らかのように、波線部分は錯簡によって誤ってここに入り込んでしまっているのである。

…哀樂相生、君子以正、此之謂五至。子夏曰、五至既聞之矣。敢問、何謂三無。孔子曰、三無乎。無聲之樂、無體之禮、無服之喪、君子以此橫於天下。傾耳而聽之、不可得而聞也。明目而視之、不可得而見也。而德氣塞乎四海、此之謂三無。

この部分の錯簡は『民之父母』があらわれてはじめて明らかになったもので、それ以前には誰一人としてここに錯簡があることに気付いた者はいない。この例は、漢代以後のテキストに少なからぬ乱れが存在することをわれわれに伝えてくれているとともに、いちど乱されて伝わったテキストをもとの形に復元することがいかに困難であるかをもわれわれに教えてくれている。付け加えれば、孔子間居篇の前半部だけが一篇として独立して流通していたということもまた、この新出土資料の出現によってはじめて明らかになったことなのである。伝世文献だけをたよりに、先秦時代の典籍のあり方を考えるのがいかに困難であるかを以上の例は明確に示している。

始皇帝の時代の焚書や、秦漢の際の戦火を思えば、漢代に残された先秦文献、特に儒家文献が少なからぬ混乱を被っているであろうことは容易に推測されるし、特に経書については漢代においてすでに、当時の伝世文献と出土した先秦テキストの違いが今古文の激しい論争を引き起こしていることをわれわれは知っている。だから、新出土資料出現以前においても、われわれ（というよりはわれわれの先達）は、伝世の先秦文献の扱いには常に

慎重であったし、厳密な資料批判を加えた上で、それを資料として用いてきた。しかし、漢代以後に残された先秦文献が被っている錯乱は、どうやらわれわれが想像していたよりもずっと大きいようなのである。われわれは新出土資料の出現をうけて、伝世の先秦文献の資料性についてもういちど考え直していかなければならない位置に立たされているのである。

伝世の先秦文献は不完全である。また、その祖本は多く漢代を遡ることができない。しかし、だからといって、それらをすべて切り捨てて先秦の思想や文学について論ずるわけにはいかない。今本『礼記』の緇衣篇にせよ、孔子間居篇にせよ、それが不完全なテキストではあっても、そこには確実に先秦に由来する要素が残されているのである。このことをわれわれに再認識させたのも新出土資料なのであるが（というのも、それ以前は少なからぬ研究者がこれらの篇を漢代の作であると想定していたからである）、このように新出土資料は、一方ではわれわれの想像以上に伝世文献の内に先秦に由来するものが残されていることを教えてくれていると同時に、他方ではそれがいかに先秦の旧を伝えていないかをも教えてくれている。

このような状況の中で、われわれはいかなる態度で伝世の先秦テキストに向かうべきなのか、そして伝世の資料と新出土資料とをいかにあつかって先秦の学術について論じていくべきなのか、このシンポジウムでの議論が、われわれが今後進むべき方向を示すものになることを期待したい。